

計画案の夢

アンピルト・プロジェクト

アトリエCOSMOS

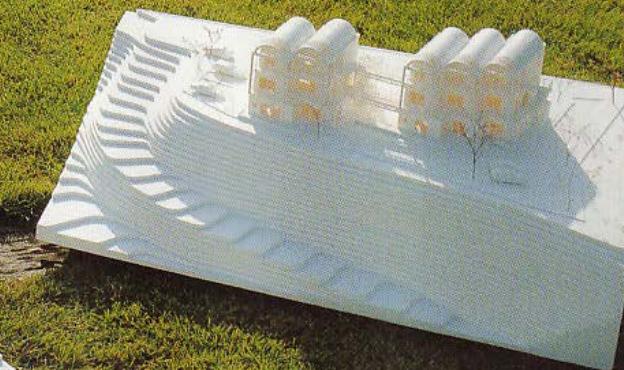
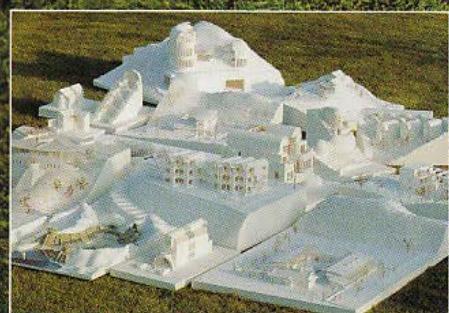
'93~'95

17 最終回

計画案全員集合！

文=白鳥健二

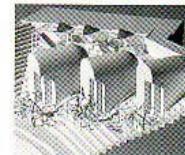
写真=大橋富夫





① 北鎌倉月谷アトリエ計画

発 載 号	1995年8月号
撮影場所	アトリエCOSMOS屋外
撮影年月日	1995年5月16日
天 气	晴れ
模型制作者	佐藤浩平



② 六浦谷戸計画

発 載 号	1995年9月号
撮影場所	アトリエCOSMOS屋外
撮影年月日	1995年5月16日
天 气	晴れ



発 載 号	1996年10月号
撮影場所	アトリエCOSMOS屋外
撮影年月日	1996年5月8日
天 气	晴れ



③ 鎌倉・小劇場計画

発 載 号	1996年11月号
撮影場所	新潟県長岡市・屋外
撮影年月日	1996年9月18日
天 气	晴れ



④ 平塚計画

発 載 号	1996年12月号
撮影場所	新潟県長岡市・屋外
撮影年月日	1996年9月18日
天 气	晴れ



発 載 号	1997年1月号
撮影場所	大橋富夫スタジオ
撮影年月日	1996年12月12日
天 气	曇り



発 載 号	1997年2月号
撮影場所	新潟県長岡市・屋外
撮影年月日	1996年9月19日
天 气	晴れ



発 載 号	1997年3月号
撮影場所	大橋富夫スタジオ・屋外
撮影年月日	1996年11月12日
天 气	晴れ

計画案全員集合！

——ひとつひとつと“夢”的集合体——

■写真撮影の現場から

「偶然の反射光だったね」、撮影機材をゆっくり片付けながら、大橋さんはボクンと呟いた。向いの家の窓ガラスに反射した夕日が、眞白な模型を偶然照らし出したことだ。この偶然を、写真家は一瞬のうちにカメラに納めた。《材木座ビーチハウス計画》はこのようにして出来上がった。

偶然と言えば、97年2月号の《宮ヶ瀬コンドミニアム計画》の時もそうだった。わざわざ撮影のため、新潟県の日本海海岸まで出掛けた時のこと、私たちは海に面した高い砂丘に撮影機材をせっせと運び上げた。辺り一面に密生しているスキのようないわくつかの草木の上に、私は何気なく模型を置いた。写真家はすでに撮影準備にとりかかっている。沖合いの佐渡ヶ島は太陽がそろそろ傾きかけた頃。「さあ、どうしようか……？」と写真家は思案した結果、「このまま撮ろう……！」と突然決断したのである。「えっ……？」と思って草木の方を見ると、さきからあの模型は気持ち良さそうに夕日を眺めているのである。写真家はすでに全体の環境と模型の表情を読み取っていたのだろうか。今ここにしか生徒していない個別の環境を、決して逃がすことなしに一枚の写真に写し込んだというわけだ。

従来から、建築家の設計計画案の模型写真にはある種の決ったスタイルがある。模型がどれだけ実際の建築に近い存在であるかを表現することが最重要となる。しかし今回の一連の模型は、すべてが「計画案の夢」の形見のようなもの。形見としての模型がいかなる状況(環境)の中に実在しているか、模型が何物の存在として、その時その場に係わっている状況。いわばミクロなドキュメンタリーやこそ、写真家が最も重要視している要素なのではないだろうか。

《武蔵工業大学・新キャンパス計画》の場合も、私が模型を箱から取り出して、写真家のスタジオのテーブルの上に置くと、すぐさま「いいね、そのまま……！」と、写真家は前から決めていたかのように言った。今度も「えっ……？」と思ってテーブルの方を見ると、模型の下に読みかけの新聞が積んであるではないか。今、世間を騒がせている銀行・証券不祥事のニュースが一面トップに大きく出ている。計画案の模型は、勿論この不祥事の記事とは何の関係もない。偶然新聞がそこにあっただけだ。ただ、キャンバス計画の立案作業に関する大学理事会の手法に対して、「そんなバカな……！」と思われるを得ないときはあった。私自身、これに関して負のイメージを持っていたことだけは確かだ。写真家は若干とまどっている私をよそに、すでに助手の大橋美紀さんと撮影の準備に入っている。一枚の作品が出来上がろうとしている。私の住む鎌倉市は今、市長選挙戦の真最中。連日各候補が己の名前を連呼しながら通りを車で走り抜けしていく。あれから4年。《鎌倉山ケアセンター》の実

現が今の市長によって中止となったのが、前回の選挙直後のことだった。老人ケアセンターをはじめ、他の特養ホームの事業中止等、鎌倉市の高齢者福祉政策の極端な立ち遅れが、今、対



▲大橋富夫撮影

立候補によって指摘され、攻撃を受けている。こんな出来事をよそに、ケアセンター計画案は、97年1月号の誌面で満月の夜空に青白く輝いている。一切の恨みつらみをよそに、すでに別世界に存在している。前年の96年10月21日、私は福島県裏磐梯の湖畔で満月の一晩を過した。「今ここに模型があったなら」と思うのだったが、それは無理な話。「せめて次の満月の夜に模型をここに運び込んで……」。私は写真家にダダをこねると、「私のスタジオで満月の夜をこしらえよう」との返事。「ダダをこねた甲斐ありだ。後日、あの時の無限の宇宙がスタジオに再現され、被写体は私の希望以上の雄姿で画面いっぱいに登場することになった。

しかし私が驚いたのはその雄姿ではない。写真家の大切なブルーリングトに大きな満月と星の数枚の無数の小さな穴があけられてしまっていること、そして更にびっくりしたのは、スタジオ内に架けられているこの特大ホリゾントのすぐ向う側は、真昼の世界なのである。月明りも、星のまたたきも、その正体は、バックの真裏から差し込んでくる太陽光線なのだ。“陰の明り”は、実はすぐ後の“陽の光”によって作られていたことである。

この一年半、撮影現場に同行して、写真家のファインダーを通して自分の作品を眺めることが出来たこともさることながら、17点の被写体を通じて、写真家大橋富夫の作品が出来上がっていくプロセスの一部始終を密着体験出来たことが、他の何よりも興味のあることであった。

「この次は実物を撮ろうね」、大橋さんのこの一言が私の体の中で、今でもこだましている。

■模型制作の現場より

模型の作り方は使用素材の種類によってそれこそ千差万別だが、以前私がアリゾナで制作したことのある方法で最も印象に残っているのが、液体プラスターの打設による模型制作だ。ハオロ・ソレリのスタジオで会得した方法である。

スタイルフォームで原型を作り、そこにプラスターをキャスティングして硬化させ、脱型するとそれで出来上がりだ。純白で、ソリッドで、無機質で質感感にあふれ、物体に発生しているモノクロームな陰影は質感でありながら確固たる主張性に富み、設計プロセスにおけるほんの刹那的な役割を負ひながら永続性を示唆するような、そんなところが私にはたまらない。このモノクロームな質感感を、発泡材を使って表現出来ないかと試みたのが今回の17点すべての模型である。一見重々しく見える模型も実は軽くて保管し易く、壁掛け等の展示も十分可能だ。助言を余す必要としないばかりか持ち運びも簡単だ。

将来、もう少しゆっくりとした時間が取れた時には、かつてアリゾナのソレリスタジオで会得した、あの茫洋とした砂漠に流れる時間がほぐくんだ質感を備えた、オブジェのような建築模型を作ってみたいのだ。

最後にこれ等17点の模型の殆どすべてを制作してくれた建築家の佐藤浩平君他、数名のスタッフに心から感謝したい。これ等の模型は当アトリエの貴重なる蓄積であり、今後に大いなる指針を示してくれる永久保存資料となることは間違いない。



▲模型制作の現場／佐藤浩平さん



① 材木座ビーチハウス計画

発 載 号	1997年4月号
撮影場所	大橋富夫スタジオ・屋外
撮影年月日	1996年12月26日
天 气	晴れ



② 永平寺町立図書館計画

発 載 号	1997年5月号
撮影場所	アトリエCOSMOS
撮影年月日	1997年3月10日
天 气	晴れ



③ 鎌倉市立御成小学校私案

発 載 号	1997年6月号
撮影場所	鎌倉市二階堂・屋外
撮影年月日	1997年3月26日
天 气	晴れ



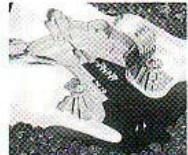
④ 覚園寺の家計画

発 載 号	1997年7月号
撮影場所	大橋富夫スタジオ
撮影年月日	1996年5月21日
天 气	晴れ



⑤ 武蔵工大・新キャンパス計画

発 載 号	1997年8月号
撮影場所	大橋富夫スタジオ
撮影年月日	1997年6月26日
天 气	晴れ



⑥ 伊豆半島・田子マリーナ計画

発 載 号	1997年9月号
撮影場所	大橋富夫スタジオ
撮影年月日	1997年7月中旬
天 气	晴れ



⑦ つくばアートギャラリー計画

発 載 号	1997年10月号
撮影場所	アトリエCOSMOS
撮影年月日	1997年8月3日
天 气	晴れ



⑧ COSMOSハウス実施計画

発 載 号	1997年1月号
撮影場所	アトリエCOSMOS
撮影年月日	1997年3月24日
天 气	晴れ